

第2分科会「里山と野生動物」

「里海とクジラ」～ホエールウォッチングにいこう！～

日 時：2007年4月7日（土）13:00～17:00

場 所：千葉県立中央博物館 講堂

参加者：約40名

趣 旨：

人・森・川・田んぼ・そこに住む動物たち等……その一連のつながりのなかで「里山」は存在しています。人が生きるために利用し、支えてきた里山。その里山に様々な問題が生じているのが現在の状況です。野生動物の問題にしても、動物たちと人との間によこたわる様々な深刻な問題（生息地の開発、農作物被害等）が存在します。千葉県内に於いても、サル、イノシシ、外来種による問題は深刻化しつつある。

ところで、千葉県は里山だけでなく美しい里海に囲まれている。里海とは、里山の概念を海に当てはめた言葉で、人が生きるために利用し継続的に手を入れてきた海のことです。

その里海を、同じ哺乳類であるクジラ・イルカも利用して暮らしています。そのクジラ・イルカを観察する「ホエールウォッチング」が現在世界各地で行われているが、新たな里海の利用形態になりうるのではないか。今回は野生動物の問題から少し離れ、動物たちが本来持つ素晴らしさを生かしたウォッチングという利用形態の可能性とその問題点を考えて行きたいと思う。



講演会：

講演1「銚子沖の鯨類について」

（宮内幸雄：銚子海洋研究所 所長、フリッパー号船長）

銚子沖は日本屈指のホエールウォッチングの適地である。夏はスナメリ、冬はマッコウクジラをはじめ、周年クジラ・イルカを観察することができる。本講演では、貴重な画像や映像を通じて、銚子沖で見られる鯨類の解説をしていただいた。



講演2「世界のホエール・ウォッチング、歴史と現状」

（舟橋直子：IFAW〔国際動物福祉基金〕ジャパン事務局長）

舟橋直子氏には世界中のホエールウォッチングを見てきた立場から、ホエールウォッチングの歴史や世界で行われている状況、また動物福祉からの観点について話していただいた。

講演3「漁師にとって、ウォッチングこそが現代、未来のイルカ・クジラ漁である」

（石井泉：城ヶ崎イルカ・クジラ・ネイチャーウォッチングセンター代表、光海丸船長）

富戸は代々クジラ漁が行われてきた土地である。そんな中で、クジラ漁に疑問を抱き、一人ホエールウォッチングを始めた石井泉氏の奮闘ぶりを話していただいた。ホエールウォッチングは現在のクジラ・イルカ漁だ！



パネルディスカッション「これからの日本のホエールウォッチングを考える」

司会：菅原茂（NPO法人国際海洋自然観察員協会 会長）

パネリスト：宮内幸雄、舟橋直子、石井泉、中村松洋（夢鯨の会 会長・松鶴丸船長）

講演者3名に、いすみでスナメリのホエールウォッチングを行っている中村松洋氏を加えて、ホエールウォッチングの問題点やこれからの可能性について活発な議論が行われた。以下に、論点とそれに対する発言をまとめます。



★イルカ・クジラが見えないときはどうするか？

日本でのホエールウォッチングは「クジラを見せる」という点にフォーカスが行き過ぎていて、全てを楽しむという視点には至っていない。クジラ以外の自然や景色を見て、海に来たなら何でも楽しんでもらいたい。そのためには、海鳥など専門性のあるガイドによる解説が必要。一人でも多くの人に感動を伝えられるようなプロを育てたい。また、お土産やその他の魅力等、ホエールウォッチング以外でも楽しめる地域作りが必要。

★ホエールウォッチングをするには漁港が必要。協力を得るために、どう漁師に理解してもらうか？

ホエールウォッチングが商売になるのかと疑問視された。また魚を食べるとしてクジラ・イルカを敵視している漁師もあり、当初は理解が得られなかった。しかし、頑張っている姿を見せることで協力してもらえるようになった。ホエールウォッチングには泊りがけで来る人がほとんどなので、その経済効果は大きい。小さいお金でも、地域が目・意識を変えるには十分だった。また、地域の子供の環境教育にも利用されている。漁師にはこれらの点を踏まえて理解してほしい。また、漁師にとっても、ホエールウォッチングは投資が少なく始められる事業である。

★これからのホエールウォッチングに期待するものとは？

ホエールウォッチングをしていると海の視点から山を見ることができる！これからは、海だけでなく周り環境を一続きの自然として感じてもらえるような自然学校をやりたい。また、漁協を挙げてホエールウォッチングをバックアップすることで、地域が活性化し漁業の復興につながるのではないかな。

日本では調査・研究の協力の視点が少ないのではないかな。協力によって、新しい知識を得るだけでなく危険を未然に減らすことができる等のメリットがある。また、ホエールウォッチングが盛んになることで、イルカ・クジラの行動に配慮しない業者が現れることがある。そのため、観察のためのルールを作る必要があるかもしれない。



クジラ漁については一度整理をする必要がある。千葉ではツチクジラ漁をしている地域が今もあるが、この先クジラの漁を認めるのか、地域文化として認めるのか、それらを考えていく時期になっている。しかし、クジラ漁を行っている漁師には後継者不足と年の問題が付きまとっているため、自然消滅的になるかもしれない。ホエールウォッチングが新たなイルカ・クジラ漁だ。

まとめ：

里海という環境を利用したホエールウォッチングは、地域の活性化に寄与する。ぜひ里海に足を運んでもらいたい、またホエールウォッチングを通してその素晴らしさの一端を体感してほしい！